

# 高齢者の交流形態と精神的健康の関係

## —対面交流と非対面交流に注目して—

CHENG YUTIAN

居住形態が大きく変わっている現在において、独居高齢者の増加といった社会問題が存在している。独居である高齢者は他者との交流が減少し、精神的健康に対して悪影響が及ぼされるリスクが考えられる。一方、高齢者は独居であっても、必ずしも精神的健康に対して悪い影響がもたらされるとは言えない。高齢者は独居であっても、ソーシャルネットワークを築いて交流することができれば、精神的健康が良好に保たれる可能性があると考えられる。

交流は対面交流と非対面交流に分けられる。コロナ禍の影響のため、高齢者の対面交流及び非対面交流の現状は不明瞭である。高齢者の交流の精神的健康に対する影響に関する研究において、対面交流と非対面交流を分けて調査することが少なく、非対面交流相手との関係についての調査も不十分である。また、対面交流と非対面交流それぞれの精神的健康に対する影響についての検討も不十分である。なお、高齢者の交流の総合評価として、ソーシャルネットワークが多く使われているが、ソーシャルネットワークを交流のように対面と非対面で分けて検討する研究はなかった。

そこで、本研究は高齢者の対面交流と非対面交流、それぞれと精神的健康及び主観的幸福感との関係を検討することを目的として実施した。

研究 1 では、高齢者の対面交流と非対面交流に対して、対面ソーシャルネットワークと非対面ソーシャルネットワークを使って現状を確認した上で、居住形態、対面ソーシャルネットワーク及び非対面ソーシャルネットワーク、それぞれと精神的健康及び主観的幸福感との関連を検討した。

まずコロナ禍が高齢者の交流と精神的健康に及ぼす影響を確認した。その結果、コロナ禍において、男性では友達・近所・親戚との対面交流及び非対面交流が有意に増加した、女性では別居子との交流が有意に増加した。また、コロナ禍の長期化に伴い、精神的健康は顕著に低下した。

高齢者の対面ソーシャルネットワークと非対面ソーシャルネットワークの現状を確認した。その結果、対面ソーシャルネットワークにおいて男女差は見られなかったが、非対面ソーシャルネットワークにおいて女性の方が有意に大きかった。また、男女とも対面ソーシャルネットワークと非対面ソーシャルネットワークの相関が有意に大きかったことから、高齢者の非対面ソーシャルネットワークの交流相手は対面ソーシャルネットワークの中に含まれていることが示唆された。

居住形態と精神的健康及び主観的幸福感との関連を男女別で検討した。結果として、性別にかかわらず、独居と精神的健康の間に有意な関連は示されなかった。女性において、独居と主観的幸福感の間に有意な関連は示されなかった。男性において、独居と主観的幸福感の間に有意な負の関連が示された。つまり、独居であっても、高齢者女性の精神的健康と主観的幸福感は良好で保たれることが示唆された。また、独居である場合において、男性の主観的幸福感は低下するが、精神的健康は良好で保たれることが示唆された。

対面ソーシャルネットワークと非対面ソーシャルネットワークそれぞれと精神的健康及び主観的幸福感との関連を検討した。結果として、男女とも、対面ソーシャルネットワークのみ、精神的健康との間に有意な正の関連が示された。また、女性において、対面ソーシャルネットワークのみ主観的幸福感との間に有意な正の関連が確認された。男性において、対面ソーシャルネットワークが小さい場合のみ、非対面ソーシャルネットワークと主観的幸福感の間に正の関連の有意傾向が示された。結果から、高齢者にとっては、

非対面ソーシャルネットワークはあくまで対面ソーシャルネットワークに付随するもので、男性の対面ソーシャルネットワークが小さい場合以外、代替として機能しないことが示唆された。なお、女性の主観的幸福感にとって、非対面ソーシャルネットワークより、友人や近所などの人との対面ソーシャルネットワークの方が重要であることが示唆された。

研究 1 の結果から、非対面交流と精神的健康及び主観的幸福感の関連は、ほとんどの場合において見られなかった。しかし、非対面交流には、手紙、電話やビデオ通話など様々な種類がある。研究1では非対面ソーシャルネットワークでは非対面交流をまとめて扱い、種類の多様性を考慮していなかった。

そこで、研究 2 では非対面交流と精神的健康及び主観的幸福感の関係を検討することを目的とし、非対面交流に利用する媒体の特徴に注目した分析を行った。

非対面交流の媒体利用の組み合わせを「媒体利用パターン」と呼ぶ。

まず対象者の媒体利用パターンを潜在クラス分析によって抽出した。結果として、対象者は「媒体利用なし」、「音声」、「文字写真音声」、「全種類」の 4 群に分けられた。

次に、媒体利用パターンと精神的健康、主観的幸福感及び対面交流頻度との関連を検討した。方法として、媒体利用パターンと性別を独立変数とし、精神的健康、主観的幸福感および対面交流頻度に対する二要因分散分析を行った。

媒体利用パターンと精神的健康及び主観的幸福感の間の関連を検証したところ、結果として、男性において、「媒体利用なし」群は他の群のより、精神的健康と主観的幸福感が有意に低かった。女性においては、「文字写真音声」群は「全種類」群より、精神的健康と主観的幸福感が有意に低かった。その他の有意差は示されなかった。結果から、媒体利用パターンによる精神的健康及び主観的幸福感の差は確認できなかった。また、男性において、非対面交流なし群は他の群より精神的健康及び主観的幸福感が低いことが分かった。

次に、媒体利用パターンと対面交流頻度の関連を検証した。結果として、男性において、「媒体利用なし」群は、他の群と比べて対面交流頻度が有意に低かった。女性において、「媒体利用なし」群は「全種類」群より対面交流頻度が有意に低かった。結果から、男性において、対面交流が少ない人は非対面交流も行っていないことが分かった。

本研究のまとめとして、研究 1 では非対面ソーシャルネットワークにおける性差が確認され、研究 2 では媒体利用状況にも性差が確認された。媒体パターンと精神的健康、主観的幸福感及び対面交流頻度との関連を検証した結果、男女の傾向は異なっていた。よって、高齢者の交流に対する研究するには、対面と非対面で分け、及び男女別で検討することが必要であることが示唆された。

課題と展望としては、今後は高齢者の交流に対する調査を行う際には、交流相手との関係性を詳しく聞く必要があると考えられる。また、高齢者の交流に対する研究は、身体機能、同居形態、デバイス所持状況といった要素を含めて現状調査し、検討することが重要であることが考えられる。これらを踏まえて、高齢者の交流と精神的健康の関係に関しては、さらなる検討していく必要がある。(臨床死生学・老年行動学)